

到 津 伸 子

追 悼



到津 伸子 (いとうづ のぶこ 1947年—2019年1月31日)

日本の画家、エッセイスト。

東京都生まれ。東京藝術大学美術学部卒業。その後渡仏、1977年パリで個展を開き、パリ・東京を拠点に活動。2003年エッセイ『不眠の都市』で講談社エッセイ賞を受賞。

父、到津十三男は朝日新聞社、海外特派員としてドイツ滞在歴があり、NHK国際政治の解説委員も務め、ワイマール共和国、ナチスに関する著書、訳書もある。

毎日新聞社、創設者の吉武鶴次郎は祖父であり、徳富蘇峰、徳富蘆花は大伯父である。

到津の出自は、宇佐神宮の神官、旧男爵の係累である。

宇佐八幡は天皇家の祖神を祀った神社で、卑弥呼の墓（古墳）の上に建つと言われており、全国4万6千社ある八幡社の総本社である。伊勢神宮と二所宗廟の石清水八幡宮は分社である。

- 1982年 「ジョルジュ・バタイユ生誕100年展」(オクセール/ヴェズレー)に若手画家として唯一、フランシス・ベーコン、ジャコモメッティなど世界の巨匠と並び招待出展
- 1983年 同展覧会がギャラリー・ジャンクロード・ダヴィット (グルノーブル)で開かれ作品出展
ギャラリー・ジャン・ブリアンス (パリ)の「ベーゼ (Baiser)」展出品
- 1984年 番町画廊 (東京)で個展
- 1985年 セルジ・ポントワーズ市主催「10人の日本人画家展」
ヴィレッジ・ヴォイス展 (パリ)
- 1986年 UNAC TOKYO (東京)で個展
ギャラリー・ジャン・ブリアンス (パリ)で展覧会
ユネスコ (パリ)にて「日本人画家展」出品

- 1987年 西武百貨店渋谷店ギャラリーにて個展、及び全館ディスプレイ・エキシビジョン
- 1989年 銅版画集「ドリアン・グレイの肖像」
(林グラフィックプレス)出版
番町画廊にて個展
FOU PARLEに数回掲載
- 1990年 アルファ・キュービック・ギャラリー (パリ)で個展
アルファ・キュービック・ギャラリー (東京)で個展
- 1992年 マリ・クレール (中央公論社)に「パリ・メランコリア」(画・文)を連載 (12月より1年間)
- 1995年 Bunkamuraギャラリーで個展
画文集「パリ・メランコリア」(三五館)出版
Bunkamuraギャラリー「ジャン・コクトー展」出品
- 1998年 「画家猫カーチャ」(アートデイズ)出版
- 1999年 番町画廊にて個展
Colas Foundation (Paris)作品購入 (グレーグリーンの夕景)同財団で展示
- 2002年 「不眠の都市」(写真&エッセイ集/講談社)出版
- 2003年 「不眠の都市」にて、第19回講談社エッセイ賞受賞
- 2004年 ギャラリーサンカイビで個展
目黒区美術館にて「目黒区の美術—2004」に出品
- 2005年 ギャラリーサンカイビで写真展
- 2018年 銀座三越ギャラリー「あすは上天気 ボーイフレンド・ガールフレンド&猫たち」作品展

著書

- 『パリ・メランコリア 光と匂いと色彩と…発光する街のレシ』三五館 1995
- 『画家猫カーチャ』絵・文 アートデイズ 1998
- 『不眠の都市』講談社 2002

呼びかけ人

青目 海
浅野 幸彦
阿部 日奈子
石内 都
伊藤 操
上杉 満代
上原 木呂
越前 里佳子
奥田 真平
川端 公子
北川 健次
金丸 義郎

熊谷 雅明
倉坂 益子
耕作 清光
小坂 泰子
三枝 亮介
柴崎 吉郎
柴崎 広子
蟬丸
茶園 敏美
天童 大人
中本 道代
中山 雅仁

西北 八島
花房 孝典
平田 美智子
舟越 美夏
古川 勞
皆川 充
山田 ひろみ
吉岡 耕二
ジャック・レヴィ
渡邊 知子

青目 海

物語のない思い出

伸子と初めて会ったのは、パリのモンパルナス、メヌ通りの古いアパートで、エレベーターはなく、最上階の六階の部屋までは木の螺旋階段を登らなくてはならなかった。

そこには、私より二ヶ月ほど前にパリに着いた男Uがいた。

伸子もパリに来たのは数ヶ月前で、二人がどのような経緯で一緒に暮らすようになったのかはわからない。

私のアパートが見つかるまでの間、三人は一緒に暮らすことになったのであるが、それがほんの二三日であったか、二ヶ月とか三ヶ月であったのか覚えていない。

もう四十年以上も前のことだ。

貧しかったに違いないが、それも記憶にない。

とにかく、若い三人の日々は輝いていた。

いつか安井曾太郎賞をもらったら「いりません……」と断ることが、そのころの伸子の不埒な目標で、Uと私にはパリにいる特別な理由はなかった。

六月のパリは日が長く、とっくに夜の時間となっているのに、淡い光りがプラタナスの街路樹の葉陰から射し込んでいる。

そんな日暮れ時になると、私たちはめかし込んで六階からゴトンガタンゴトンと音をたてて一階まで降り、華やいだパリの

街に繰り出すのだった。

メヌ通りを抜けるとすぐに、浮き立った人々で賑わうモンパルナスの交差点にでる。それを右に曲がり、モンパルナス大通りをまっすぐに進むとコルクの専門店があった。コルクのコートにハンドバック、靴にタバコ入れ、眼鏡入れ、財布にがま口……なにもかもがコルクで出来ている。

そのすぐ先には、ラ・クーポール。ここは朝方、パーティーやディスコ帰りに寄ってオニオングラタンを食べる店だった。

通りの向こう側には、ル・ロトンド、ル・セレクトが並び、やがて右側に、ル・ドーム。

かつてはピカソやモジリアニといった画家たちが集い、サルトルやボーボワールなど作家や文化人が通ったという、いずれもモンパルナスが華やかかりしころの名残りのカフェが並んでいる。

その中の一軒に入り、知り合いに挨拶し、ボルドーを一杯ずつ注文して席に着く。

傍らの髪振り乱した老婦人が声をかけてくる。

「ねえ、ところでノーベル文学賞を、私は一体いつもらえるのかしら……どう思う」

そこに現れたのは、時代錯誤も甚だしい貴族風の礼服を着た老紳士。

「誰か、私の田舎の城をもらってくれるものはいないか、どう

だいキミ……」

などというのだった。

他愛のない話をしながらワインを飲んでしまうと、レンヌの大通りに戻ってサン・ジェルマン・デ・プレまで足をのばす。

教会の前から通りを振り向くと、真っ正面にモンパルナスタワーと呼ばれる大きなビルが見える。それはパリのほとんどの人が大嫌いな代物で、当時のパリの町並みにはそぐわなかった。

サンジェルマン・デ・プレ教会の向かいには、レ・ドゥ・マゴ。

大金持ちの観光客や、有名な映画スターが出入りする華やかなカフェだ。

そこからセーヌ川に向かう小さな路地には、伸子と私のお気に入りのお店がたくさんあった。

意地悪な店員がいる本屋、洒落たブティック、花屋、小さなアクセサリーの店には、魔法使いのおばあさんのような店主がいた。

時々、Uがイヤリングなどを買ってくれることがあり、そんなことで私たちは大喜びしたものだ。

ラ・パレットのテラス席は満員で、とびきりのオシャレな人たちが集まって食事が始まっていた。

私たちは、ゆっくりと歩いて暮れゆくパリを味わう。

伸子は美しい女だった。

散歩の間中、すれ違う男たちや女までもが伸子を振り返った

り「なんて、きれいなんだ……」と、つぶやく声が聞こえたりする。

私もUもその度に、とても誇らしいような気持ちになったものだった。

伸子とは物語としての思い出はない。

どれもが断片的で、昔観た映画のワンシーンが蘇るように、記憶の奥から一瞬現れたりするのだ。

あるとき、カメラマンの田舎の家に遊びにいったときのことで。

とても暑い日で、伸子は裏庭で子供用の水桶を見つけ裸で水浴びをしていた。

夏の盛りで辺り一面にさまざまな花が咲き乱れ、私はその脇の寝椅子で本を読んでいたのだが、その家の末っ子の男の子がやって来て、こういった。

「う～ん、なんていい匂いなんだ……とても、美しい」

ついこの間までおしめをしていたような子が、絶え入るような声でいうものだから、伸子と私はびっくりして顔を見合わせた。

確かに伸子の裸はため息がでるほどきれいだった。

それは日本人離れした、泰西名画にでてくるような豊かな女のからだで、肌は透き通るような青みがかった桃色だった。

それからしばらくして私は帰国した。

結婚し、夫の仕事先であるスペインやモロッコに移り住むようになってからは、手紙や電話で連絡を取り合っていたが、しばらくすると音信不通になった。

その後、伸子がパリで一人暮らしを始めたと聞き、ランブトンの小さな中庭のある家を訪ねたことがある。

引っ越したばかりでなにもないけれど、ワインとチーズは用意しておく、というので、私は近くの花屋で野の花をひと抱え買った。

あの郊外の花の咲く野原の水浴びを思い出したからだった。

小さなパテオを囲んで幾つもの石段が並び、その先に古びたドアがあった。

ちょっと荒れたような庭は私の好みだった。

「素敵な庭ねえ……」

そういうと伸子は、えっ、という顔をして首を傾げてから、フフ……と笑った。

「気に入ったなら、よかったわ」

伸子は、古いテーブルに真っ白なクロスを広げているところだった。

「家具付きだけど、ロクなものがないのよ」

私は、建てつけの悪い戸棚をこじ開けるとガラスの瓶を探し出し、花を飾った。

揃いではなかったけれどワイングラスを二つ、皿を出してチーズを並べ、伸子がワインを開けた。

「オープナーがなくて、お隣から借りたの……」

しかし、乾杯してすぐに伸子がなにかにつまずき、テーブルの上の花瓶を倒した。

ガラス瓶は大きな音を立ててワインのボトルやグラスをなぎ倒し、花がテーブルの上に投げ出された。

転がったボトルからワインが流れ出し、白いテーブルクロスをみるみる赤く染めていく。

二人は茫然とそれを眺めていた。

散らばった房状のブッドレアやレースフラワーの下を、ワインが生き物のように這い広がり、その中で割れたワイングラスのかけらがキラキラと光っていた。

伸子が新しいワインを開けながらいった。

「このままでいい？」

「うん……きれいだもの」と私は答え、戸棚から新しいワイングラスを出した。

それからどうしたのか、どんな話をしたのか覚えていない。

覚えているのは、伸子がどうしてひとりになったのかを聞かなかったことだけで、ただただ、美しいテーブルの記憶があるだけだ。

これがパリで会った最後になった。

やがて私はポルトガルの小さな漁師街に移り住むことになり、それと入れ違うように伸子は日本に帰国した。

その後、パルコやアルファ・キュービック、文化村などで展覧会を開き、伸子はまぶしいような存在で、あのパリでの散歩のときのように、誇らしくもあった。

しかし、その心は空虚に支配されてもいたようで、私が帰国するたびに伸子は嘆いた。

「絵が描けない……日本にインスピレーションを感じられない」
孤立したまま時が流れた。

いや、孤立とは違う。自分を取り囲む全てのものと距離をおき、伸子は、深く、自分との対話を選んだのであろう。

そして書き上がったのが「不眠の都市」だった。

本は、講談社のエッセイ賞を取り、このときもまた、私は大いに気をよくしたものだ。

最後に会ったのは二〇一〇年、久しぶりで二人で食事をした。
結局はパリの話になった。

「いま考えると、楽しかったわね、あの頃……」

伸子は遠い目をしてつぶやくようにいった。

そして、二〇一六年、私は永住帰国した。

伸子には知らせなかった。

彼女同様、日本の暮らしにいつまでも馴染めず、辛かったか

らだ。

二〇一九年、突然の訃報はパリから入り、事情が全くわからずパニックになった。

やがて最後を看取ったのが、中山さんだとわかって心底安心した。

私たち夫婦と彼らは、時々、世田谷あたりの静かな街路樹の下や夜の公園を散歩したり、ひと気のないバーでワインを飲んだりしたことがあるのだ。

口には出さなかったが、この静かな夜の過ごし方は、伸子と私にとってあのパリの散歩にちょっと似ていた。

二人は伊豆の私たちの別荘に、泊まりがけで遊びにきたこともあった。

伸子がいなくなってから不思議なことが続いている。

終の棲家と決めた伊豆の家において伸子のことを考えていると、まるで返事でもするように、ドン、ドンと屋根になにかが落ちてくるのだ。

庭で盛んにニャーニャーと呼ぶ声が出て窓から顔を出すと、四十年も前にパリのアパートで伸子が飼っていたミミがいた。

ミミは生のひき肉が大好物だったが、あるとき伸子がうっかり全部焼いてしまった。その時の怒った顔のミミが、窓を見上

げニャーニャーと鳴いていた。

またあるとき、探し物があって引き出しをあけると、折りたたんだ便箋がひょいとでて来た。

「お便りありがとうございます。久しぶりのお便りを、とてもとても楽しく読みました……」

という出だしで始まり、四月で二十九才になったとある。

四十年も前の伸子の手紙が、新しい家の新しい机の引き出しにあることが不思議だった。

そのすぐあとで、廊下に立てかけてあった姿見が倒れ、ひびが入った。

その割れた傷がきれいでそのままにしておく、ある時、裁縫箱の中に小箱を見つけた。

開けてみると、中からきれいなビーズがこぼれ落ちた。

あっ、と思った。

それは、私がパリから帰国するとき、お別れに伸子がくれたものだった。

蚤の市で見つけたそれを、伸子がとても大切にしていたことを私は知っていた。

私は、何日もかけてビーズを姿見のひび割れに沿って埋め込んでいった。

その姿見の中に、伸子が映ってくれないものかしら……と願いながら。

小箱一杯のビーズは、不思議なことに一粒も残らず鏡のひび割れにぴったりと収まった。

このような伸子のいたずらが、いつまでも止みませんように……と、願いながら私は伸子の不在をやり過ごしている。

そして、たった今、思い出したことがある。

伸子は爪を噛むクセがあった。

短く噛み切られた爪は、クールで現実離れした伸子にはなんだか不釣り合いで、しかし、いじらしく、愛おしくさえ思える。

阿部 日奈子

彼女は誰にも似ていない

素敵な女性と知り合うと、頭のなかに鳴り響く一つの歌がある。セルジュ・ゲンズブールの”ZIZI, t’as pas ton sosie”だ。ジジは不世出のエンターティナー、ジジ・ジャンメール。「ジジは誰にも似ていない、唯一無二のその個性、ああ、かけがえのない君、ジジ」という楽しいシャンソンで、ローラン・プティがジジのために創ったレビュー「ジジ・ジュテーム」のなかで歌われる。到津伸子に初めて会ったその日にも、この歌が空から降ってきた、”NOBUKO, t’as pas ton sosie”と。

到津伸子との出会いは、一九九四年初夏のことだ。造形作家の北川健次が数人の友人を伴って私の古い集合住宅を訪れ、そのうちの一人が到津だった。話すうちにそのころ到津が借りていたアトリエが私の家から徒歩一五分ほどのところとわかり、一同でそちらへ移動することになった。駒込六義園の脇に立つ木造のアトリエは、もともとそこを仕事場としていた画家が、パウル・クレーのバウハウス時代のアトリエを模して建てたものという。四〇平米ほどの広さで天井が高く、北向きの磨りガラスの窓から自然光が射し、静かで落ち着いた心地良い空間だった。

壁に立てかけられた到津の作品を見ながらパリ時代の話聞いたが、それらは翌九五年刊の到津の第一エッセー集『パリ・メ

ランコリア』に収められた、見事な筆致のパリ点描とほぼ重なる内容である。エッセー集に拾われていないトピックのなかでは、ブラック・パンサーの活動家キャスリーン・クリーヴァーに会った話が面白かった。逃亡中のクリーヴァー一家がフランス政府の許可のもと、しばらくパリに滞在していた一九七四年か七五年のことだろう。到津はキャスリーンについて「冷静でとても恰好いい女性」と語ったが、そういう到津自身が、構えずに人と接して相手の防備さえ解いてしまう恰好いい女性だった。

上杉満代の舞踏公演を見に行ったおりに、思いがけず到津に出会い「今日はどうしてこちらに？」と尋ねると、上杉とは旧知の仲とのこと。親交を深めたのがパリだということも、この二人にはなんともふさわしい。上杉もまた、たぐいまれな個性をもつダンサーだからだ。到津と上杉が、なんでもない話を取りとめなく交わしながらパリの街を散策する姿を想像すると、とても豊かな時間がそこにあると思われるのだった。

散策しながら到津が足を留めて眺めた街や人や猫は、モンパルナスのアトリエでカンヴァスに描かれる。先に触れた『パリ・メランコリア』には、到津の水彩が挿絵のように多数挟まれていて、七階のアトリエから見下ろすネオンサイン、ハمامの湯煙に浮かぶ物憂げな裸体、バステューユの深夜のカフェ、クレーギーホースの伝説のダンサー、オワズ県ラヴネルの冬、壁があった頃のベルリンの夜など、画題からも一九七〇～九〇

年ごろの空気が伝わってくる。今回この原稿を書くにあたり再読して、独特の色調で描かれたこれらの絵と、マーヴェラスな人々が次々登場する文章から、到津伸子のあの雰囲気、あの声、あの眼差しが甦るのを感じた。誰にも似ていない素敵な人の精神は、いまでも作品のなかで大らかに息づいている。

伊藤 操

伸子さんの愛猫ノンちゃん

私は到津伸子さんに直接、お会いしたことはないのですが、不思議なご縁で伸子さんと出会いました。2022年2月22日の猫の日に、2003年に22歳で亡くなった私の愛猫ニニコのことを、フェイスブックに投稿したら、中山雅仁さんという作家の方からメッセージをいただきました。

「ニニコちゃんが、東京とニューヨークを往復して、22歳で亡くなったとは凄いですね。僕の愛猫ノンはパリと東京を往復して21歳で2004年に亡くなりました」

こうして、猫バカ親同士の猫自慢が始まったのです。そして、中山さんのパートナーの到津伸子さんも猫が大好きで、『画家猫カーチャ』という大人向けの絵本も出し、ノンちゃんをととても可愛がっていたとのこと。伸子さんは2019年に亡くなり、中山さんは彼女の作品の著作権者なので2022年10月の“偲ぶ会”の企画者であり、彼女の遺作の出版を計画しているとのことでした。

伸子さんの作品に興味を抱いた私は、彼女の経歴を見て驚きました。彼女は1992年12月号から1年間、マリ・クレール誌で『パリ・メランコリア』という連載をしていたのです。私は1982年からニューヨークに住み始め、ファッションライターとして、日本の新聞、雑誌に寄稿していました。そして、マリ・

クレール誌に93年1月号から『NYレクイエム』と『NY A to Z』という2つの連載を始めました。伸子さんの連載は私の連載『NYレクイエム』の次のページでした。1回目の『NYレクイエム』はアンディ・ウォーホルについて書きました。伸子さんはウォーホルとも親しい友人とのことでしたので、きっと私のこの記事を読んでもくれたと思います。また『NY A to Z』のCの回では、CATを取り上げ、米国の猫ブームについて書き、私のニニコが窓からマンハッタンの摩天楼を見下ろしている写真を掲載しました。猫好きの伸子さんはこの猫の記事もきっと読んでくれたと信じています。

『パリ・メランコリア』連載を私も読んでおり、画：文 到津伸子というクレジットを見ながら、こんなに観察眼に優れた文を書き、個性的な画を描く人はどんな人なのだろうかとまだ行ったことのないパリの匂いや色、空気そして、風を送ってくれるこの連載を楽しみにしていましたが、連載が終わると彼女のごことは忘れてしまったのです。自分の連載がまだ続いており、ニューヨーク・コレクション報道など新聞社の仕事や、93年の翻訳本『明日元気になあれ Dr. ジュディの愛と性のセラピー』の出版、94年の私の最初の単行本『ティナの贈りもの』の取材・執筆で忙しく、ニューヨークの喧騒にまぎれて、パリの匂いや色も私には遠い存在になってしまったのです。

そして、29年後の2022年に、猫を通して、伸子さんの遺族

に出会い、伸子さんに再会したのです。95年に単行本として出版された『パリ・メランコリア』をアマゾンで注文したら、なんと、“親愛なるXXさん。愛を込めて 1995年2月27日 Nobuko Itozu”というパリの友人あての伸子さん自筆のサイン入り本が届いたのです。パリの友人あての本がどうして私のところへ届いたのか不思議ですが、私は勝手に天国の伸子さんが私にパリの匂いと風を届けてくれたのだと解釈しています。この本の後書きを読んで、80年代、90年代にニューヨークと東京を往復していた私は、同時期にパリと東京を往復していた伸子さんと同じ思いを抱いていたことを知り、さらに伸子さんとの距離が縮まった思いがしました。

後書きで伸子さんはこんな風に書いています。「往復しているといつも、なぜこちらにいてあちらにいないのだという思いに囚われる。(中略) 東京ーパリを往復しているとパリにいた時は思いつかなかったことを思いつく。パリでは日常の現実が東京に来ると架空の物語に思えたりする (後略)」

こんなメランコリーな気分、不安感は私も東京とニューヨークを往復する生活で感じていました。どちらの生活が私の生活なのだろうか？私はどこに存在しているのだろうか？というメランコリアな気分を拭い去ることはとても難しかったのです。でも私はニューヨーカーのポジティブな考え方で救われたのです。アメリカ人と日本人の間に生まれた子供はハーフではな

く、ダブルであり、東京とニューヨークの2重生活をするのは、両都市のいいとこ取りをするダブル生活であるという考え方は、私にはニニコというパートナーがいました。伸子さんにノンちゃんがいたように。

フェイスブックを通して、こんな風に伸子さんと出会いましたが、伸子さん関連でもう一つ、不思議なことがありました。伸子さんのことを投稿する前に、『われ弱ければ、矢島楯子』という映画を見て、矢島楯子さんのことを投稿しました。矢島楯子さんは津田梅子よりも20年以上も早く、女子教育に携わり、現在も東京にある女子学院の初代院長を務めた人です。女子教育だけでなく、禁酒運動、公娼制度廃止運動などにも関わった素晴らしい女性です。74歳、88歳、89歳の時、米国に渡り、3度、大統領とも会っているのです。そして、この楯子さんと伸子さんが親戚だったということもわかりました。楯子さんは文豪、徳富蘆花の叔母であり、蘆花は伸子さんの大叔父だったのです。

矢島楯子さんという女子教育の先駆者のことを知り、到津伸子さんという画家・作家の素晴らしさを改めて知りえたことは私にとって大きな収穫であり刺激になっています。

ニニコが引き寄せてくれたこのご縁に感謝しています。今ごろ、ニニコとノンちゃんは天国で仲良く遊んでいることでしょう。そして、いつか、私も天国で伸子さんとお会い出来ること

を願っています。その時は、ニニコを膝に乗せながら伸子さんとおしゃべりなノンちゃんとどんな話しようかと妄想するのが、最近の楽しみなのです。

石内 都

同い歳の女

到津伸子の訃報を知ったのは彼女がなくなって半年ほどたった時だった。1年ぐらい会ってなくても不思議なく、時々電話で話すくらいで日常的に連絡することはなく過ごしていた。訃報が届かなかった理由がある。彼女が亡くなる1年前に暗室のある家を処分して別の土地に移っている時期だった。転居通知は出していない。郵便物は1年間、2019年1月20日までは移転先に届いていたが、彼女はその10日後に亡くなっていた。

訃報を知らなかった半年の間、到津伸子を送ってくれた彼女のデザインしたティーカップ一式とマグカップを使っていて、ある日マグカップの取手が欠けてしまいそれを捨てる気になれず、なんとなく欠けた取手の付け根の危ない部分を金ヤスリでゴリゴリ削り、取手のないマグカップとして使っていた。

到津伸子の描いた猫がデザインされたティーカップとマグカップは、意外とかわいらしく、女っぽく、少し拗ねた感じが気に入っていた。その取手のないマグカップを使い始めたころ、彼女はもうこの世にいなかったことになる。

まったく別ルートから彼女の訃報を知った時は本当に信じられないことだった。最後に会ったのは2017年12月横浜美術館で開催した私の個展のオープニングレセプションの会場だった。髪の毛が白くなって少し老けた感じだったが話せば何も変わり

なく、彼女の放つオーラが独特な雰囲気を醸し出していた。そんな到津伸子が大好きだった。

彼女との初めての出会いは「1・9・4・7」シリーズのモデルを務めてくれた1989年である。その当時、40歳を迎え、この先どのように生きていくのか、ふと足を止めて考えていた。40年間の時間を写真に撮ることができるかもしれないと思い、同じ年生まれの様々な50人の女性の手と足の撮影を進めていた。写真関係の知人の紹介で「1・9・4・7」の撮影の最後として、到津伸子の手と足がモデルになったのである。撮影させていただいた彼女たちとはその後ほとんど会う事は無いのだが、到津伸子はパリに住んでいたので私がパリに行く時は必ず会っていた。彼女の部屋へ何度か出かけ、おしゃべりをするのが楽しみだった。パリに居る彼女は日本人と言うよりも、完全にパリの街に溶け込んでパリジェンヌのアーティストそのものだった。

それから数年後、日本へ戻った彼女は、母親と駒場に住んでいたが、一度も行くことはなかった。訃報を知って何度か駒場に電話をしたが、「現在は使われていません」と言うばかりなので、もう駒場の家は無いものと思い、仕方がないと諦めていた。いつだったか電話で夜中にアメリカ軍の戦闘機が飛んでいて、あまりにうるさいので警察に通報したと話す。全く取り上げる気のない警察に怒り、東京の空、いや日本の空は日米地位

協定で完全にアメリカに支配されていることを、この国の未来の無さを2人で長電話をしたことがある。その時私は、彼女が話をしている部屋について質問をした。「到津さんの部屋ってどんな風なの?」「私の部屋にはちりが積もっていて、そのちりが真綿のように白く綺麗なのよ」と言った。

そして今年突然、中山氏から連絡が入り、駒場の家が今もあることを知る。

「1・9・4・7」の手足の写真は、もはや32年前に発表した作品だ。私の写真の歴史の中で重要なターニングポイントとなる作品である。「1・9・4・7」の最初の撮影の相手は荒木陽子だった。彼女は写真集の出版を見ず42歳で亡くなった。そして最後を締めくくってくれた到津伸子は72歳だ。今年も横須賀で撮影した高校時代の同級生がなくなり、ポツリ、ポツリと写真の中に存在することとなった。果たして撮影者である私はいつなんだろうと、彼女たちの手と足の写真を見ながら考えてしまう。

「1・9・4・7」は固有名詞がなく、「House Wife」「Clothing Shop Assistant」「Artist」と社会的な呼び名がついているだけで誰の手、足かわからない。撮影した私は当然、到津伸子の手と足は知っている。彼女と過ごした密度の濃い時間を写真に定着させることができたのは、生きていた豊かさと存在の証しを示すことになった。

それにしても訃報を受け取らなかった私としては未だに到津伸子がないことが信じられず、次のオープニングレセプションにスーッと静かに格好良く現れるような気がしてならない。

奥田 真平

地下鉄の入口で

ノスタルジーの喫煙者

80年代半ば、ギラギラのバブルに突き進む直前の六本木は、まだしゃれたキラメキが残っていた。友人の紹介で向かったウナックサロン。『ノスタルジーの喫煙者』に出会ったのはそこだ。40号ほどのグリーン紙にパステルで殴り描きされたような男の肖像。煙草をくわえ小さな黄色い花束を握っている。その少し悲し気なロマンチズムにグッと引きこまれた。「ノスタルジー」という言葉にも響くものがあった。夢から遠のいていくようなそのころの自分の気分を重ねていたのかもしれない。欲しい。が、分不相応だなーなんて思いながら佇んでいたのだろう。サロンの女性から分割でもいいですよ、と声を掛けられ、「ノスタルジー」は僕の元へやって来ることになった。その時が作者である到津さんとの初めての出会いだ。到津さんは購入者に対し笑顔で挨拶をしてくれたと思うのだけど、彼女の華やかな印象しか残っていない。なんだか気恥ずかしく僕はそそくさとその場を引き上げてしまった。

赤ワインとブラックコーヒー

到津さんが拠点を少しずつ東京に移したこともあり、その後たまに食事をご一緒するようになった。80年代は手ごろなビスト

ロやカフェが少なかったけれど、そんなところを探して行った。鳥居坂下にあったレ・シューや、彼女のパリ時代の友人が経営していた一番町のオー・バトー・イーヴルは何度か行った。到津さんは赤ワイン好き。ハウスワインが一番いいのよ、ってことで、頼むのはいつもリーズナブルなハウスワイン。話題は主に映画について、というのも86年から僕は映画の仕事始めていたので合わせてくれたと思う。彼女はパリのシネマテークで映画の記憶もたんまり蓄積していた。レオス・カラックスなんて、私たちの周りでフラフラしてたわよとか、佐田啓二がカッコいいってパリの女の子たちが騒いでいたわ、といったゴシップ風の話にも事欠かない。もっと後の話だけど、高倉健がひと月ほどパリに滞在していたときは、毎日のように会っていて、健さんが店のドレスをごっそりプレゼントしてくれようとするので困った、なんて話も思い出す。締めはいつもブラックコーヒーでタバコをくゆらす。それがあまりに自然で板についているパリの女。コーヒーといえば、コーヒー飲みながら新聞読んだりするの好きよ、とも言っていた。へー新聞も読んでるんだ、と思ったけれど、お父上が新聞記者だったというのは最近まで知らなかった。

椿姫

90年代になり僕が会社を作って1、2年たったころだと思

う。思い立って不遜にも到津さんに絵をオーダーした、それも女性の裸像。到津さんは面白がって快諾してくれ、暫くして届いた額の梱包をほどくと、黒い瞳で正面をじっと見すえる素っ裸の堂々たる女が立ち現れた。赤い唇、豊かな乳房、漆黒の長い髪にはピンクの椿の花、わりと真ん中で目立つ陰毛、手には煙草、一面深紅の背景とコバルト色に塗られた特製額。塗り重ねのきかない水彩で一気に描かれた、現代の「椿姫」だ。以来この50号の挑発的な「椿姫」は、引っ越しを重ねながらも常に家の中心に鎮座している。ところで、僕は到津さんの裸像を見たことがある。マスオにどうしてもって頼まれてモデルしたのよね、と少し怒ったように呟きながらチラッと見せてくれたヌード写真。池田満寿夫撮影のそちらも、ゴージャスでグラマラスな「椿姫」、だった。

画家猫カーチャ

90年代も終わりに近いころ、猫の絵本を出すからという話を聞き、じゃあ出版記念パーティをやりましょうと申し出た。猫のカーチャって名前がロシアっぽいから、神谷町にあったロシア正教の寺院を模したレストラン、ヴォルガを貸し切りにして、到津さんの古くからの友人たちを招待した。招待状は一つ一つ到津さんがラメ入りのペンで絵を施したカードと封筒で送られ、健さんにも送ったわよと聞いてたのでかすかに期待した

がさすがにご本人は現れなかった。セネガルのダンサーがジャンベに合わせて激しく踊る、なんてショーもあり、ル・モンドの特派員にも手伝ってもらって一部始終をビデオ撮影した。しかし今どこを探しても撮影テープが見つからない、残念。そういえばこのとき会場ド真ん中のテーブルに男が腰を据えシャンパンボトルを次々と注文していた。パーティが終わって、図々しい人がいたわねー、と到津さん。え、到津さんの友人では？え、あなたの知り合いだと思って黙ってたんだけど…。この勝手に紛れ込んでいた招かれざる客、今はちょっとした有名人らしい。

メランコリア

到津さんは、あるころから描く以上に書くことに注力し始めた。書くこといっぱいあるのよ、変な人たちいっぱいいて、とにかく面白かったわ。今もうあんなのないじゃない。日本はどう？つまらないでしょ、パリもね、サンジェルマンの、みんなが行ってたル・ディヴァン（本屋）なんかもディオールになっちゃったし、変わったわ。彼女の話によく登場した仲良しの「変な人」が、『ファンタスティック・プラネット』のマルチな作家ローラン・トポールと、後にイザベル・ユペールがその役を演じたスキャンダラスな写真家イリーナ・イオネスコ。いや、到津さんも十分に変な人だわと思いながら、彼女の話してくれ

るサーカスのような世界の片隅にいたかったなあと痛烈に焦がれた。書くことは、彼女が変な人たちと暮らした80年代までのパリと今のパリ、パリと東京、その隔絶の淵に漂うメランコリアの正体を確認していく作業だったと思う。原稿用紙のマス目の空白を一文字一文字埋めていくのが絵を描くのに似ていて面白いのよ。そう言ってた彼女の原稿は、越えられない時空のキャンバスに描かれた壮大な絵画なのかもしれない。

メトロ

たぶん2018年の11月くらい。数年がかりの原稿も上がったから久々に食事を、ってことだったのに、バタバタしていたのか外苑前の居酒屋へ。本のために羽田や東京のいろんなところにロケ取材に行ったわよ、といったよもやま話がふっと途切れた時、彼女がバッグから1枚の写真を取り出した。モノクロームの古い写真に写っていたのは、モダンでおしゃれな美しい女性。きれいな人ですねー！と思わず叫んだ。まさかと思ったが、やはり到津さんではない。母よ、たぶん渋谷で撮った写真…。戸惑った。なぜこの写真を持ってるんだろう、見せてくれる機会はいくらでもあったはずなのに、なぜ今？そもそも到津さんが自分から家族のことを語るなんて珍しいな、そんな思いが酔った頭の中を駆け巡ったが、わけわからぬままに、なぜかその写真を記憶しなきゃいけない気がした。帰り、表参道駅

の入口付近まで歩き、じゃあ今度は春になって本が出たら盛大にいきましょう！なんて軽口を叩き、到津さんが微笑みながら頷くのを確認し手を振って別れた。あの地下鉄はパリのメトロへと繋がっている。いつかまたメトロから地下鉄に戻ってきて、少しアンニュイな空気をまとった到津さんが階段をゆっくり上がってくるだろう。その時は、小さな黄色い花束を握って迎えるつもりだ。

北川 健次

私が画家の到津伸子さんと最初にお会いしたのは、当時契約していた銀座の番町画廊であった。ある日、私が画廊に入っていくと、画家とおぼしき目の鋭い利発そうな女性が自作の版画を床に並べて、画廊主の青木宏さんと個展の打ち合わせをしているところであった。青木さんが、「到津さん、彼が北川健次さん！……」と紹介すると、その女性はチラリと私を見て「あぁ、パリで池田満寿夫さんから、あなたの事は聞いてたわ、彼は褒めていたけど、でも私には鎖国時代の伴天連（バテレン）のような版画にしか見えないわ！」とズバリ言った。私は「バテレンとは面白い！……確かにそうかもしれないね！」と笑い返すと、一転して柔らかな微笑を見せてくれた。私は「……この人とは、永い付き合いの友達になるな！」と直感した。そして思ったとおり、以後40年近い付き合いの、云わば同志のような関係を結んでいく事になる。……到津さんは、芸大の油画科を卒業すると、すぐに単身でパリに渡り、30年近い日々をパリでボヘミアンかつ高等遊民のように画家生活をして過ごすという自由な人生を選んだ。そして鋭い独自の眼を養っていき、あくまでも世間の常識には囚われない、醒めた批評精神の持ち主となっていった。……………昨年11月末、私が本郷の画廊で個展開催中にも来てくれて、一緒に画廊を出て、夕暮れの神田川沿いの道を歩いた。彼女は、今年の4月に急逝したお母さんの

話をして、「母は、来年の桜の咲く頃に私は死ぬわと予言して、そのとおりに突然亡くなったの」と話し、「よかったら母の写真、見てくれる？」と言って、バッグの中から一枚の写真を取り出した。凜とした、美しい顔の女性で、横光利一の小説『上海』にでも出てきそうな、品格と謎を秘めたような姿がそこには写っていた。「美しいね、この時代の女性の美しさを全部持った人だね」と話すと、嬉しそうに笑った。……到津さんは最近、急に足が痛みだし、画廊に来る前に順天堂病院に寄ってから画廊に来たのだという。「あなたは、大丈夫なの？」と言うので「膝が痛い時があるけど、気にしてないよ、なんだかピノキオが壊れていくみたいで、意外と自分で面白がってるよ」と話すと、相変わらずね……とばかりに笑ってくれた。……それから、この国がもはや体が無いまでに狂ってしまっている事、松本竣介……の事などを話しながら歩き、御茶ノ水駅まで来て、「じゃ、さようなら」「またいつか！」と言って握手をして別れた。改札口に向かう彼女を見送りながら、とても不思議なくらい気持ちの良い別れ方だったなと思い、清々しい余韻が残った。……それが、まさか到津さんとの、この世での最後の別れになるとは知るよしもなく、私は年が明けても、時おり、その日の事を思い出していた。……………到津さんと深く関わっておられたギャラリーサンカイビの平田美智子さんから、「到津伸子さんがスキルス性の癌で今朝亡くなられました」と

の知らせが入ったのは昨日の夕刻であった。私と別れてから1週間後にガンが見つかったが、もはや手遅れであり、僅か1ヶ月半後の先日の早朝に亡くなられたのだという。有明がんセンターの最上階、彼女の病室の窓からは、東京湾の眺望が眼下に広く眺められる、彼女の人生の終章に相応しい壮大にして美しい眺めであった事を、連絡を頂いた平田さんから伺った。……そして私はいま、走馬灯のような思い出の数々を振り返りながら、茫然としているのである。

到津さんとの思い出は幾つもあるが、やはり、私がパリに住んでいた28年前の時が最も記憶に残っている。……パリ6区のサン・ミッシェル通りとサン・ジェルマン通りが交差する角に老舗のカフェがある。その中で私と彼女は珍しく深夜まで真剣に話し合っていた。彼女はそれまで、画家でありながら雑誌にパリの文学者へのインタビュー記事などを時おり書いていた。その文章の座りかたや切り口に独自の才能を感じた私は、この辺りで拠点をパリから東京に移して、文章も本格的にやっていく事を薦めた。彼女の独自の視点と、日頃語る切り口は、話をするだけでなく、文章にして残す形、第三者にも広く伝わった方が良く思ったのである。……私はその後に拠点をロンドンに移す事になりパリを去るが、その頃に彼女は腹を決めて日本に拠点を換え、文章での表現活動も積極的にやっていく事とな

った。……彼女の文才に眼をとめた編集者が動いて、雑誌「マリ・クレール」にパリの日々を綴った連載を書き始め、次にエッセイをまとめた『不眠の都市』を講談社から刊行した。私は送られて来た本を読んで、その才能に震えた。そして彼女にすぐに電話をして「エッセイの形を借りた、これは間違いなく文学だよ！……小説に膨らむ主題を、あえてエッセイの鋳型に入れた事で内容に膨らみと艶が出ている！到津さん、見てごらん、この本は間違いなく賞を取るから！！」。……果たして私の予言した通り、この『不眠の都市』は、その年の第19回講談社エッセイ賞を授賞する。……吉行淳之介、池内紀、四方田犬彦、阿川佐和子、須賀敦子……と続いたこの賞はレベルが高く、このまま文章と絵画、そして以前から始めていた写真の幅広い作家活動を開始するかと思われた。しかし、到津さんは次は長編の小説に挑むという。……私はその話を聞いて、珍しく反対の意見を出した。……彼女の本質は短編こそ合っていると分析し、その事を伝えた。あたかもスノードームのような掌に乗る器のかそけき短編の中に、パリで体験した事実と、虚構を入れ混ぜて、非在のパリ、非在の東京を往還し、彼女が私に教えてくれた、パリに実在する美しい言葉―「冬のサーカス」の語感のような夢のアラベスクを織り込んでいく事にこそ、彼女の最たる可能性があり、その方向を独歩していけば、彼女しか出来ない新たなジャンルを確立出来ると私は思ったのである。

……しかし、到津さんは、私は長編小説で行く！という。彼女の体験の中には、まあしかし、エッセイや短編の形でなく、長編でしか立ち上がらないイメージ世界も秘かにあるのであろう。そう思った私は、その後の執筆を遠くから見守る事にした。……そして、その後、私自身も次第に文章を精力的に書き始め、文藝誌『新潮』での発表を機に、新潮社や求龍堂、他から単行本を出し、写真集も刊行していく事になり、到津さんと会って話をする時は、絵画、文学、映像、写真、……多岐に渡った話をする仲になり、表現活動における貴重な同志のような存在になっていった。常に考える人であり、故に話も面白く、……故に今、大きな何ものかを失ったような不条理な喪失感が私を襲っている。……到津さんは、その後、10年以上をかけて長編小説に挑み、600枚以上を書き上げて、校正も終わり、まさに刊行直前での急逝であったと聞く。……彼女の死を知った夜に、到津さんの夢を見た。……というよりも、亡くなられて間もないこの時に、別れを告げに現れてくれたのだと想う。……夢はこうであった。……綺麗な屋敷の中の端に不思議な幾重にも折れ曲がった長い階段を何故か私が上っていく。……階段の下に到津さんがいて、私に「ねぇ、面白いでしょ！」と下から声が聞こえてくる。私はズンズン上りながら「まるでピラネージやエッシャーの絵のような果てのない階段だね」と言う。彼女は「面白いでしょ、きっとあなたなら面白いと言って

くれると思ったの！」と弾んだ声が聞こえてくる。しかし、次に上から声をかけても、下にいる筈の彼女の存在感が、いつしか消えており、私は階段の上に在って、但、空（くう）を見つめる所で、弾けるように夢は終わったのであった。……夢から醒めた私は、この無限に長い階段の意味を考えて、スッと気が付いた。……この長い階段は「長編小説」の暗示なのだ気が付いた。到津さんは、私に十年以上をかけて書いた600枚に到る長編の小説を、私に読ませたかったのだと気が付いたのであった。……「地上とは思い出なりき」と稲垣足穂は語った。また澁澤龍彦は「人生とは夢のようだという言葉があるが、本当に夢なのかもしれないね」と亡くなる直前に語った。……また、「私達の終の住みかとは忘却である」と、ある詩人は私に語った。……とまれ、私は最後に御茶ノ水駅での別れの時に到津さんに交わした言葉―「また、いつか！」を思い出の中に放って、しばしの魂の交感をしたいと思っている。

熊谷 雅明

到津さんの絵は歴史教科書にのっているフランス革命の女性が上半身を出し先頭に立ち民衆を導き、突進して行く自由、平等、博愛の絵に自分の持っている性格からくる絵の表現が、共通性を感じる。

女性が馬にまたがっている

男性は、どこか弱々しい顔、姿の表現

打たれた、ボクサーの男の顔

彼女からの長い電話で印象にのこっている事は、渋谷NHKで見たのだと思うが、テレビの4Kだか5Kだかの映像画面の話しで

「とてもキレイデ（色彩が）細かいうなじまで、細部までハッキリ写っている」とおどろいて話してきた事でした。

私はテレビの映像の写りに興味を持っている事に、何かおどろいた思い出です。

彼女の作品がいろいろと語ってくれると思います。出合いで、作品の売り物が出たら、買って楽しんで下さい。

また会いましょうと書いておきます。

小坂 泰子

追悼文

到津伸子さんから、今年も年賀状が届かなかった。きっと出版の最後の作業でお忙しいのでしょうと短絡的に考えていた。そしてそろそろ出版記念会の案内状が届く頃かも知れないと楽しみに待っていた。

ところがである、8月に、パートナーの中山雅仁さんからの電話で、到津伸子さんの訃報と今年が3回忌になる。10月に「偲ぶ会」を開くと、全く藪から棒のお話を伺った。

私は、2018年12月12日付けのお手紙を到津さんから受け取っている。その文面にはお母様を亡くされたことに触れて、「こんな年までわがままいっぱい好きなことだけをやったかられたのも母のおかげだった。」と、感謝の気持ちと母親を誇りに思う思いが切々と綴られていた。さらに到津さんはこの思いを胸に制作に励みたい。そして、「10年かかってやっと小説が完成したので、来年は、出版の作業に追われるでしょうが、その後は油絵に戻りたいと思っています。年が明けたら、是非お会いしましょう。久々にお会いするのを楽しみにしています。」と、未来への強い意欲を語り結んであった。2枚の便箋に書かれた便箋の裏面を指でなぞって見れば、一字一字の文字

が感じられるほど確りした筆圧で、お元気であった。

到津伸子さんにはじめて会ったのは、1986年の秋、写真ディレクター山岸享子さんの事務所であった。山岸さんから「池田満洲夫さんのお友だちで、パリと東京を拠点に活動していらっしゃる画家到津伸子さん。」と、紹介された。すらっとした身長の理知的な顔の美しい人は、ベルばらのオスカルを思わせて素敵だった。

その日をきっかけに山岸さんに誘われて、unc tokyoで開催中の到津さんの個展（東京）などを見に行くようになり、ときどきお会いした。

その頃、写真家の石内都さんが、「同年齢の女性の手と足と顔の接写をしたい」と企画して、友人知人に声掛けがはじまった。到津伸子さんもそのひとりだった。到津さんは承諾した。撮影場所は写真ディレクター山岸享子さんの自宅が提供されることに決まった。

同年齢の生身の女性の手や足、顔をアップで撮るという石内さんは、その人物を想像させる装置に向き合っているに違いない。

到津さんは、モデルを繰り返し見つめキャンバスに絵筆を走らせるのが日常の行為である。その行為が、石内さんの被写体

になることで、無防備な形で見つめられシャッターを切られるという、立場が逆転する。到津さんに戸惑いはなかつただろうか。いや、もしかしたら到津さんは撮られながら楽しむかもしれない。なぜならば到津さんも写真を撮る画家だから。石内さんに写真を撮られながら、石内さんのなすことを感じとり、このころのカメラは動いて、石内さんを撮るに違いない。

私は、日本と韓国の石の仏像（石仏）を撮っている。人間界の年で言えば、およそ1300歳位からの造立で、山野で見かける石仏や磨崖仏である。

遠い歴史の流れの中で防ぎにくい天災や人災によって破損した顔のない仏像が立っている。また、手足を損じ、顔に傷のある石仏が坐している。それぞれ修復も可能だが、元の形には戻らない。しかし、石だからこそ多少の面影を止めている。石仏は祈られて温かい。そんな石が、石仏が好きで撮っている。

撮影当日がやって来た。

山岸宅の明るいリビングルームの絨毯の上に白布が敷かれた。35ミリカメラを抱えた石内さんと到津さんは、膝を折って向き合った。ひとことふたこと会話がかわされ開始した。白布の上に手が差し出され、足がさらされ、足の向きが変えられ、石内さんは、身をかがめ、身体と身体が触れんばかりの距離で冷静

にシャッターを切っていく。

そして最後の撮影は、リビングルームの白壁が利用された。顔の撮影である。

色白の胸を深くはだけて撮られている。到津さんの少しはにかんだその表情が少女のように愛らしく無垢な感じが印象に、残っている。到津さんの素顔であろう。

シャッター音のみが響く静けさの中で、熱をおびた「撮る、撮られる」撮影は、無事に終えた。立ち会った山岸さんと私は、立ち上がって、夢中で大きな拍手を送っていたことを覚えている。

石内さんのこの作品は、さまざまな同年齢の女性の手と足の構成によって、石内都写真集「1・9・4・7」（1990）として素晴らしい写真集が出版されている。

2015年、到津さんから銀座三越で10年ぶりに個展を開くと案内状が届いた。その余白に「本当は出版記念展になるはずだったけど、間に合いませんでした。」と残念そうなメッセージが書かれていた。

私は、体調を崩し始めた山岸さんと恵比寿駅で待ち合わせをして会場に入った。大勢のお客さんを出迎えていた到津さんは、私たちをめざとく見つけてにこにこしながらやって来た。

到津さんは私に「山岸さんを連れてきてくださったのね。ありがとう。」と喜んでくださった。そして「石内さんも来てくださるって。」と、聞いて、久しぶりに四人が、顔を合わせられると嬉しくなり、しばらく展覧会場にいたが、山岸さんの体調が気がかりで、石内さんに会わずして、「よろしく伝えて」と言い残して会場を出てしまった。到津さんが少し痩せられた様子も気になったが、ここ10年近く心血を注いで頑張ってきた小説がもうすぐ完成するのだ。目の前だ。完成したらゆっくり休養ができる。元気になる。そんな風に思っていたのに、四人で会うチャンスも逃がしてしまった。到津さんに会うのもあの日が最後になってしまった。かえすがえすも無念だ。

破損した石仏の手や足の撮影が、私に出来ても、生身の女性の手や足を撮ることなど考えられない。卓越した石内さんの発想力で「1・9・4・7」の撮影現場に山岸さんと二人で立ち会えたことは生涯の思い出となった。

山岸享子さんと池田満寿夫さんの繋がりが、到津さんを結びつけ、到津伸子さんとのご縁が、私へと繋がった。ご縁という運命に感謝したい。

1987年から届いていた猫たちや十二支の絵を描いた夢のあ

る楽しい到津さんからの

年賀状が届かないのはさびしい。

もう会えないのは本当にさびしい。

到津さん！山岸さんが、2018年3月に、一足早く逝ってしまったの。そちらで会えましたか、石内さんは只今も絶好調を驀進中。私は片づけられなくなり、おたおたしていますのでもう少しこちらにおります。

到津さん！

そちらに行ったら声をかけてね。是非お会いしたいから。(合掌)

蟬丸

到津さんの思い出

1980年代の事だと思います。私が初めて到津さんに会ったのはパリのディスコティックでした。山海塾のメンバーやその友だちたちに連れられていろいろなところに出かけていました。フランスに行き始めた頃で情報を集めるためだったと思います。友だちの友だちを紹介してもらい人脈を広める作戦です。舞台技術担当の私は人と話すのは苦手だったのですが自分たちのやっていることを説明するために広報担当のメンバーに連れ出されていました。後からディスコにやって来た到津さんはその場に合わせた着こなしたかったのでしょう、かなり派手な貴婦人の雰囲気だったので強い印象を持ちました。

その当時モンパルナスの高層マンションに住んでおられて何度か遊びに行きました。池田満寿夫さんや佐藤陽子さんを紹介されたのもその頃のことだと思います。

酒を飲みながらの会話なのでその前後のことを覚えていないのですが彼女が「下手な賞を貰うと経歴に傷が付く」と言ったのです。ものすごいことを言う人だと私の記憶にずっと残り、その後会うたびにその言葉を思い出しました。

また、フランスの地中海に面した地域を車で走っていたときのこと、この当たりの湿地帯に野生の馬の群れが居るという説明を聞いていたとき、不意に「前の車を追い越して。」と言うの

です。言われるままに加速して追い越しましたが、のどかな風景の中、前の車の映像が邪魔だったのかなと思いました。

その後何度もお会いしているのですが何を話したかあまりよく覚えていません。35年以上前の印象がずっと続いていました。最後にお会いしたのは2015年世田谷パブリックシアター公演の時だと思いますが、この時髪型のせいか洋服のせいか彼女が急に老けた印象を受けました。話し方は以前と同じなのですが妙に落ち着いた感じです。その後知人に電話で「到津さんがお婆さんになっちゃった。」と知らせたのです。貴婦人からいきなり年老いた魔女の風格に変わったのです。何か企んでいるに違いないと思ったのですが、もしかするとその時肉体に異変が起きていたのかもしれないと今になって思います。

茶園 敏美

画家猫カーチャ回顧展

アタシには秘密がある。時空を超えることができるんだ。アタシはこの能力を、リン兄さんから教えてもらった。当時のアタシはまだ、ほんのお子ちゃまだった。

アタシは風邪をこじらせて衰弱し、びんちゃんに助けられた。すぐ回復したアタシは、びんちゃんと一緒に暮らしている。

びんちゃんとの生活は気に入っている。びんちゃんは日中お仕事に出掛けて夕方に戻ってくる。アタシはびんちゃんに戻るまで、びんちゃんの部屋で自由気ままに過ごすのだ。

いつものように食事を終えて、お昼寝でもしようと思度をしていたときのこと。シルバークレーの光沢の、品の良いロングコートを纏った貴公子がアタシの目の前に現れた。

吸い込まれそうなエメラルド色の瞳の端正な顔立ち。彼のことは、よく知っている。リン兄さんだ。びんちゃんはアタシに、リン兄さんのことを話してくれたことがある。札幌での運命の出会い（！）を経て、びんちゃんと共に暮らすために神戸へやってきたリン兄さん。びんちゃんの部屋のあちこちに、リン兄さんのポートレートが飾ってある。びんちゃんのスマホやタブレットの待ち受け画面も、リン兄さん。

リン兄さんは、びんちゃんのナイトをしていたんだって。でも突然、病気になって亡くなってしまったから、びんちゃんのコ

とが気がかりだと眉根を寄せるリン兄さん。リン兄さんがアタシの目の前に現れたのは、アタシに、びんちゃんを守ってくれるよう頼むためだった。アタシは二つ返事で引き受けた。リン兄さんはお礼に、時空を越える方法を教えてくれた。本来誰でも時空を越える力があるけど、みんなその能力を忘れてるって。時空を越える方法は、一週間の特訓でマスターできた。この力を身につけると、亡くなった存在と気軽に会えるし、時空の狭間に落ちたモノを拾うこともできるんだ。

時空を越える方法を活かすときは、すぐやってきた。

びんちゃんは晩ごはんを終えて、食器を洗っていた。アタシはびんちゃんのそばをなんとなく、うろうろしていた。ふと、びんちゃんの足元でキラッと光るものを見つけた。

あ！びんちゃんがずっと前に失くした腕時計だ。

びんちゃんは失くした腕時計が恋しくてたまらないようで、時々思い出しては懐かしんでいた。そんなこと、びんちゃんはアタシに言ったりしないけど、アタシはびんちゃんの考えていることが手に取るようにわかる。失くした腕時計のデザインもね。華奢なブレスレットのような腕時計をじっと見つめていると、びんちゃんが驚きの声をあげた。

腕時計をはめて喜んでいたびんちゃんは、急に困ったような表情をして沈黙した。

しばらくして、びんちゃんはアタシにいきなりハグして、何度

も、ありがとうって。アタシはこのとき、何が起きているかわからず目をぎゅっと閉じていた。

次の日、いつものように、ひとりでおるすばんをしていると、リン兄さんがやってきた。リン兄さんの説明によると、どうやらびんちゃんの腕時計は、長い間、時空の狭間に落ちていて、アタシがそれを拾ったようだ。だからびんちゃんがアタシに、ありがとうと言ったんだ。

びんちゃんは、アタシが時空を越えることができるって、わかったのかな？

びんちゃんは見えない存在とか、そういうことに鋭いからね。リン兄さんは微笑んだ。

リン兄さんは、びんちゃんが腕時計を失くしたとき、そばにいた。だけど、そのときはまだリン兄さんは、時空を越える力があるなんて知らなかった。だから、腕時計を失くして悲しむびんちゃんに、寄り添うしかなかった。時空を越えることができるのを知ったのは亡くなった後だったと、リン兄さんは少し寂しそうな表情を浮かべた。

腕時計を見つけたあと、アタシは時空を越える方法を使うことはなかった。使う必要性もなかったし。リン兄さんとも会っていない。

そんなこんなで3年の月日が流れ、いつの間にか、アタシにち

いさな妹と弟ができた。

びんちゃんを独り占めできないのはちょっとイヤだけど、アタシはびんちゃんのナイト。

そのことを、誇りに思っている。

ある夜。ベッドの上で寝ていると、誰かに起こされた。目をこすって見てみると、知らないひとが目の前にいた。

レースのカーテン越しから夜明けの光がうっすらと、アタシの目の前にいるひとを照らす。ピーコックブルー色の丸いサングラスをかけた知性あふれる雰囲気！ 白い手袋をはめていたそのひとは、ノンと名乗った。ムッシュー・ノンはアタシに、ペパーミント色の美しい封書を差し出した。金色のにくきゅうの形の封蝋を恐る恐る爪で開けると、「画家猫カーチャ回顧展」の招待状。

カーチャさまは超有名で、もはやカリスマというかレジェンドだ。一度は会ってみたい、と誰もが思う憧れの君。カーチャさまはもう、この世にいない。あの世で創作活動を続けている、という噂もある。

ムッシュー・ノンは、回顧展はカーチャさまが主催したもので、回顧展の期間中ずっとカーチャさまもギャラリーにいますので、ぜひ妹弟たちと全員でいらしてくださいと、アタシに伝えると、朝日の光に吸い込まれるようにあっという間にいなくなった。

一瞬のことだった。アタシは幻を見たのかもしれない。でも、アタシは回顧展の招待状を握りしめている。

妹のルナ、弟のアオも起き出した。ルナとアオは目をこすりながら寄ってきて、招待状を覗き込んだ。あらためてアタシたち全員で招待状を眺めると、回顧展は10月20日から26日まで、パリのギャラリー「キャッツ・アイ」にて毎晩0時に開かれる。時空を越える方法を知らないルナとアオは、パリの開催にひどく残念そうな表情だ。

ふたりともアタシよりずっと年下なのに、カーチャさまのことをよく知っている。それほど、カーチャさまは人気なのだ。アタシは、時空を越える方法を教えるから安心して、とふたりに伝えた。急にルナとアオは活気づいた。

どうしてアタシたち姉弟が回顧展に招待されたのかわからないけれど、アタシにはちょっと気が重いことがあって。招待状には、「個性的な装いでお越しく下さい」とあったから。ルナはスリムなボディにアクアブルーの瞳がクールな美しさを放っている。アオは全身豹柄の毛皮を纏ってゴージャズ！ 幼いふたりのオシャレ度は、もう完成している。

それにひきかえアタシときたら、白いソックスに白いオペラグローブの……どこにでもいるキジトラネコジョ。これって、「個性的な装い」から程遠いよね。しいていえば、英国首相官邸ネズミ捕獲長ラリーの遠い親戚、ということがちょっと自慢……

かな。

不意にムッシュー・ノンの声をキャッチして、アタシは嬉しくなった。

「回顧展には、ムッシュー・ラリーも来るから！」

天童 大人

画家到津伸子さんのこと

Facebookで、伊藤操女史が、画家到津伸子さんのことを書かれて、読んでなかったら、今でも彼女は生きていたことだろう。

死んでいたとは到底、信じきれないのだ。そして、到津さんを思い出そうとすると、点と点とでしか思い出せないのは何故だろうか。

彼女の経歴をウィキペディアで見て、何処かに接点がないかなぞってみると、1989年に、銅版画『ドリアン・グレイの肖像』（林グラフィックプレス）出版と記されている。今は無い大森に在ったギャラリーKUMAGAIの上の階に、版画制作の林グラフィックプレスが在り、ときたま摺師の林建夫氏が仕事の合間に降りてきて、話し込んで行ったのを思い出した。1995年に三五館から最初の著書『パリ・メランコリア』を刊行していて、署名入りの著書を頂いた。だからこの時期に、到津さんにお会いしたのだろうが、度重なる引っ越しの為に、蔵書は散逸していき、見つからない。画家で作家のロラン・トポールに薦められて書いたというこの本には、魅惑的な巴里が彼女の出会った多彩な人たちと共に、描かれている。

大森に在ったギャラリーKUMAGAIのオーナー熊谷雅明氏とは、若き天才彫刻家Yves DANAの最初の海外個展を開催した

こともあり、頻繁に行き来していたが、どの時点で、画家到津伸子を紹介されたのかも本当にはっきり思い出せないのだ。それでもパリで、モンパルナスかカルチェラタンか彼女の馴染みの居酒屋に連れて行っていただいたことは、覚えているのだが。しかし、何時頃なのかと言うと本当にはっきりしないのだ。どこかでまた再会できると思っていたから、彼女が2019年1月31日に亡くなったなどとは、今でも信じられないのだ。

中山 雅仁

到津伸子のこと

人の生命に不死はなく、人は生誕の偶然から逃れられないように、皆、短かすぎる生を死へ、原子へと還っていくのである。人の生の密度を、時間の長短で測ることはできない。

存在に美を抱える者は、無意識裡にも、夭折を想うものである。ナルシスの喩えのように、若く美しいまま死んだ者と、老醜に塗れ尚、欲望に超えられた老人の価値は同一ではない。

人は、今を生きているようでありながら、今とは、一瞬ごとに過去へと飛び去り、未来は予測のなかにしかなく、人は記憶をも棲み処として、記憶にも依拠して生きているのである。過去を持つとは、より豊穡な生の処方でもあり、人が過去、死者を想う時、その人は死者とともにいる。

到津伸子の死後、近しかった何人もの人から、彼女は「浮世離れしていた」という言葉を聞いた。

浮世離れ、とは何か。

果たして現実とは、何なのか。

国家も、社会慣習も、人間が造り出した永遠の虚構であり、全てはいつか風化していく、我々を取り囲む、現状の幻に過ぎない。到津伸子とは、一緒に暮らすことはなく、彼女の死後「彼女とは喧嘩ばかりしていた」と発言すると、「(関係が) 感覚的だったのですね」と言ったのは、畏友の小池真一である。

この言葉には、皮肉の意味があるようで、なぜか彼の口から吐かれた言葉が優しく響くのはなぜか。

そう、到津伸子は、正に感覚の人だったのかも知れない。

いつか彼女が、

「私は神経が剥き出した」と言った。

そして、危険なほどの暴風雨に襲われた夜、笑みさえ浮かべて

「私は嵐が好きだ」と言った。

私は、彼女が本を読んだという話を聞いたことがなく、音楽を聴いたという言葉も聞いたことがない。

彼女は、誰かの本を読んだとしても、他者と話題にする必要がなかったのか。

彼女の死後、アトリエを整理、探索すると、膨大な量の手記が遺されていたし、夥しい量の絵画作品、習作を目にしたのだった。

彼女の絵画作品を時系列に見ていくと、豪華で優美に裏づけられ、量感溢れるものでありながら、その時に摺んだ様式を、絶えず破壊しているのを、改めて発見するのである。

彼女の、奔放に躍動超出していく、自由な精神性は、そこに在ながら、そこにさえ在なかったのだ。

彼女は、いつも静寂のなかにおいて、しなやかで強靱なエゴイズムを保持しながら、絶えることなく湧出する感性、感覚に向かいあっていったのだ。

そして彼女は、色に瞬間瞬間の全てを凝縮して、その洞察が結

実、昇華したのが「不眠の都市」の文章でもある。

その勁くしなやかな感覚は、言葉が、思考の道具や伝達的手段といった概念に捉われてはなく、彼女の孤絶が到る領域で言葉に向かいあい、教養主義者（解釈を超えない学者や凡俗の徒）には、理解を超えた空間を創っていることを、優れた読者は認識する筈である。

現在「神の死」の信仰の時にあって「個人が存在しない国」といわれる、この国にあって、世界のコロニーとして、全てが資本の論理に貫かれて、かつて存在した規範は崩壊し、特定の個人の審美眼、批評眼は許容されることなく、あらゆる価値が商品化、商品的価値でしか計測されず、全てが凡庸へと鞣されているのを、我々は今、目の当たりにしているのである。

商品として流通するとは「個人の存在しない国」の人々への低劣な奉仕品としての価値を免れない現在にあって、それらに無縁で、背を向けた到津伸子は、人間本来の野性を温存したまま生存し、生を閉じた。

彼女は、一度ならず「私は生活が駄目だ」と言い遺した。不味いものは一切口にせず、料理を作れば上手く作ったし、お酒、ワインは、私以上に飲んだ。筈である。

「遙かなる東京」（未発表の彼女の長編遺作）作中に、祖父が

言い遺した言葉

「一生遊んで暮らせ」とある。

生ある限り、肉体の桎梏から自由な人はなく、彼女は、万人に遍在する「生は苦」を抱えていたとしても、そして誰よりも強い存在感を放射しながら、私は、いつも彼女の顔から、超悠然の表情を読みとっていた。この人間世界に生起することから、どこか無頓着で、他人事でしかない貌をである。

人は恐怖との関係から逃れられず、自己正当化を論拠にする、人間世界の政治的言説なぞの虚偽を、彼女は沈黙のうちに見透していた。

ギャラリーサンカイビの平田美智子さんと食事をしながら話しをしていた時、彼女が「到津さんは、何を食べていたのでしょうか」と発言し、その場にしばし沈黙が訪れた。

私は想いだせないのである。到津伸子がものを食べていた姿を。そして、ふと不思議な感覚に捉われる瞬間がある。

到津伸子。果たして彼女は、現実に存在したのか。

人が生きて、自然と身につけていくであろう、自信や生の夾雑物、俗性を、彼女は何も身につけず、一度も涙を見せることもなく、毅然と美しいまま、恬淡とこの世を去った。

やはり、到津伸子は、何人もの人に指摘された、浮世離れした人、存在だったのだろうか。

平田 美智子

到津伸子氏は東京藝術大学美術学部卒業後渡仏し、アーティストとしてパリ・東京を拠点に絵画や写真、エッセイを発表してきた。2003年のエッセイ集『不眠の都市』では講談社エッセイ賞を受賞。彼女の書くエッセイや絵画はまさしく同じ表現の一線場であり、ボールとボールの間に潜む光のように、心の奥にじわじわと浸透して、気がつくとき世界が彼女の色に染まっている、なんとも不思議な魅力を放っている。非常に鋭い表現力と洞察力で、目線の先にある世界を独特の感性で表現してきた。

到津氏とは2000年、ギャラリーサンカイビを創業してすぐに、ある共通の知人を介して知り合った。開催した個展の回数は3回と少なかったが、彼女とは仕事外でも定期的に会って色々な話をした。卑弥呼の再来ではないかとおもうほど、いつも高貴なオーラを放っていた。聞けば到津家は代々大分の宇佐神宮の宮司の家系だという。

特に印象的だったのは、2回目に開催した到津伸子写真展。フランス滞在中の数十年の間に撮影した山のようなネガフィルムから個展用に焼く写真を厳選して、何度も何度も写真ラボで焼いてはボツにした。しまいにはラボの職人さんが悲鳴を上げた。「もうこれ以上無理です！」と。到津氏は自宅を長期で空ける

時は必ずこのネガフィルムを持って出たという。彼女にとってその当時、命の次に大切なものだったとも語っていた。「不眠の都市」にもその図版は収録されているが、紙に転写された到津伸子の世界は、日が暮れていく瞬間、光から闇に移行するその一瞬の微かな光明を捉えたような素晴らしい作品群である。

到津氏の小説「不眠の都市」が講談社エッセイ賞を受賞し、出版社の要請もあり、亡くなる前の約十年は小説を書くために絵画制作をやめ、執筆活動に没頭していった。

なぜこんなにも執筆活動が彼女を虜にしたのだろうか？アーティストとしての才能を半ば放棄して、晩年は殆ど外出せず人にも会わず、身を削って長編小説に注力していった。それは祖父の代から新聞記者で書くことを生業にしてきたご先祖様のDNAなのだろうか？毎日新聞社、創設者の吉武鶴次郎は祖父であり、そして父、到津十三男は朝日新聞のドイツ特派員も務めた。

それはある日突然の到津氏からの電話だった。末期癌になり、余命3週間の宣告を受け、今有明癌センターに入院しているのですぐ来てほしいとの連絡であった。その一月前に元気な姿を確認しているだけに、慌てて病室に行くも、きちっとした身な

りで椅子に腰掛けていた姿に一瞬胸を撫で下ろした。しかし彼女から発せられた言葉は重く、自分の死後、小説が出版されたあかつきには、美術館で展覧会をしてほしいとの遺言であった。またぎっしり手書きで埋め尽くされた何枚にも亘るA4の紙には、到津コレクターのリストが連なっていた。私は神妙に彼女の話しに耳を傾けた。それから10日ほどで風のようにこの世を去った。

それから暫くしてコロナが世界を席卷し、美術館や飲食店は臨時閉鎖となり、社会が大きく変貌を遂げた。到津氏から宿題を託された私は、未だ出版されることのない小説の行方と到津伸子展開催の狭間で、世界の安寧を祈りながら、心中穏やかではいられない。皆様の協力を得ながら到津氏の遺言を現実のものにしていきたいと切に願う。

舟越 美夏

永遠にある

東京の冬の空が白っぽく裂けたような気がして、頭がぼんやりした。到津伸子さんが逝ったと突然に知らされた朝のことは、一つの風景として頭から離れない。

永遠はあると、私は思っていたんだな。口では永遠など存在しないと書いていたのに。この時に初めて私は、到津さんと「永遠」という言葉を無意識に繋げていたのだと、気づいた。

初めてお会いした30年前から、到津さんに会う度に、自分が小さな女の子のような気がしたものだ。この世で最もカッコいい人を憧れと共に遠くから見つめる、少女のような気持ちだった。「パリ・メランコリア」の中で到津さんは、クレイジーホースのトップスターで一世を風靡したリタ・ルノワールについて「どうしても賛辞（オマージュ）になりそうだ」と書いていたが、私が到津さんに触れる時も賛辞ばかりになってしまう。

表参道の「SPIRAL」の2階の窓際で、夕暮れを眺めながらコートベルトを締める優雅な手つき。コートのポケットに手を突っ込み、渋谷の夜の裏道を歩く姿。もちろん、憧れたのはそんな佇まいだけではない。

一瞬で対象の本質を捉える目。それでいて対象を決して束縛せず、細部の陰影までを受け入れ記憶に落とし込む。鋭利な刃

物のようなのに、限りなく優しく寛容で、嫉妬という言葉が入り込む余地がないほど恐ろしく自由なのだ。

「リタ」の章に書かれた文に、私は到津さんを重ねていた。「近代社会の人間の小ささやつまらなさに出会う度に腹を立てていた」リタ。「禁忌（タブー）の境界を極めようという挑戦がありながら、それが侵し難い美しさで貫かれている」リタのストリップ。「いきなり二十歳のまま骸骨になってしまいそう」なリタ——。

到津さんの作品は、私が自分で認識していなかった脳のある部分を刺激するのだ。

個展に出かけ、そのスペースに足を踏み入れた瞬間のことは、生々しい現実として忘れられない。それまで味わったことがなかった感覚に囚われた。ここにある作品のすべてを、自分のものにしたい。自分だけのものにしたい。そんな抜き差しならないほどの強い欲求である。

一体、あの嵐のようなものは何なのか、と折に触れ思い返すのだが、そもそも私は絵に関して無知なのだ。絵を理解し、そこからさまざまなことを読みとる友人たちを羨ましく思っていたし、絵を描く衝動というものは何なのか、その秘密を知りたい、などと考えたりしていたほどなのである。

到津さんの作品を前にしては、無知であるかどうかなんてどうでも良かった。一瞬で囚われ、作品を自分のものにするこ

と。寝ても覚めても、その思いから離れられなくなり、それだけが自分の望みになるのだ。

不思議であった。私が惹かれるのはアジアの森と雨であり、パリの「メトロの匂いが恋しい」と書いた到津さんの世界とは対極にあるはずなのだ。しかし、椰子の葉の先から雨の雫が落ちる一瞬に永遠に生きていたいと思う、それと同じ快楽を到津さんの絵の、特に青色に感じていた。

到津さん、この絵をください。「ガール・フレンド」と題された水彩画を自分のものにしようと、私はおずおずと、でも切羽詰まったように言ったと思う。私が所有してもいいのかという畏れと、他の人の手に渡ったらどうしよう、という焦りが入り混じっていて、自分でも滑稽だった。到津さんは微笑んで言った。

「この十字のところの青が、自分でもうまくいったと思うのよ」

少女のような素直な喜びに不意を突かれ、私は彼女の横顔をじっと見つめたことを覚えている。

自分でも手に負えない衝動に押されて、私は他にもいくつかの作品を自分のものにした。パリの街角に現れる男女、娼館で横たわる猫、踊る猫たち、パリ郊外の並木道の写真。私の日々は彼らが醸し出す空気と共にある。

到津さんが亡くなって2年以上も経ってから、私はかつての自宅兼アトリエに入ることを許された。特注で作られたフランス風の白い扉と窓に囲まれた白い部屋に足を踏み入れ、鳥肌が立った。到津さんのエネルギーの塊が消えないまま、そこにあった。

部屋を埋め尽くす油絵、スケッチ、水彩画、文章が書き込まれた夥しい数のノート。私は床に腰をおろして、しばらくじっとしていた。いつまでもそこに埋もれていたかった。南国のあたたかな雨に打たれながら、椰子の葉を伝う雨の雫を見ている時のように、幸福で頭がぼうっとした。

皆川 充

伸子さんのこと

30年ほど前のこと、友人で文筆家の中山雅仁氏が、私の住む祐天寺の家を訪ねてきた。パリに住む芸術家、到津伸子を追っ
てこれから旅に出るといふ。彼女のことはよく知らなかった
が、友人の恋路を邪魔する理由もなく、私は彼の情熱を応援す
ることにした。そのあとどのくらいの時間が経ったのか覚えて
いないが、帰国の一報は伸子さんと一緒に日本にいるというこ
とだった。彼女をご紹介いただけるということで、私たちは駒
沢公園近くのイタリアンレストランで待ち合わせることになっ
た。

ゆったりとした時間を纏った伸子さんは優しい微笑みを湛えて
いた。私の方は彼女のゴージャスな雰囲気によって圧倒され、本物の
大人の女性とはこういうことなのだと理解した。その日からさ
ほど日の経たないうちに二人は国内旅行に出かけ、行き先で出
会った神社で挙式をしたとのことだった。よく宮司が引き受け
たものだと思ったが、二人にふさわしいように思えた。

伸子さんとの付き合いはそこから始まり、その後は彼女の芸術
活動をできる範囲で応援させていただいた。最後のやりとりは
彼女の訃報を知る直前のことだった。猫のイラスト「カーチ
ヤ」の著作権のことや手元にある作品についての相談だった。
少し時間をもらって打ち合わせをすることになったが、一度電

話を切った数分後にまた電話があり、とりあえず油絵の一枚を
持っていて欲しいといふ。その時には気づく由もなかったが、
自分の死期が近いことを悟ってのことだったと思う。

彼女の作品は私の熱海の別荘に飾った。私の別荘は彼女と交流
のあった故池田満寿夫さんのアトリエ兼美術館の近くにある。
彼の葬儀に参列した際には、きつこの別荘の前を彼女はタク
シーで通り過ぎたことだろう。池田さんは彼女の大学の先輩で
もあり、彼との交友は彼女に一定の影響を与えたのではないか
と私は思っている。しかし、彼女が著名な彼の芸術活動を高く
評価することは一度もなかった。二人とも優れた芸術家だが、
生き方は確かに違っていた。

「あなたにピッタリの絵があるの。ひとつの額に二枚の絵を組
み合わせて初めてうまくいった作品なの。」

私は絵を確認することもなくその絵を購入した。ブルーで描き
上げられた男性の顔と、意味を失ったアルファベットの二枚が
ひとつの額の中で調和していた。謎めいたメッセージと作品は
彼女そのものであり、私は今もその作品を眺めながら思考を続
けている。

山田 ひろみ

到津伸子さんと私の出会いは、東京芸大人形劇団「ふうふうの小さな部屋」です。1967年の春でした。彼女は芸術学科、私は工芸科の一年生。初対面のことは全く覚えていませんが、彼女とは映画や芝居を見に行ったりといつも一緒でした。彼女はお母様が作ったアメリカ製のプリントコットンのミニスカートをいつも履いていました。立派な足でした。私はその布を売っている所を見たくて、下北沢に連れて行ってもらった事があります。田舎者の私には行く所、見る物、初めての事ばかりで、東京育ちの彼女には私の反応が面白く見えたかと思います。

芸大祭1年目の人形劇上演には、彼女のお母様も見に来られていました。私の姿を見て、あんなに天真爛漫な子は見たことない、と言われていたそうです。多分、彼女には家族のことなど悩みもあったのでしょう。多くは語りませんでした。弟さんの死はきつかったと思います。

大学紛争の真っ只中だった3年目の芸大祭では、アラバールの「卵の中のコンサート」を上演しました。到津さんが書いてくれた、とてもいい脚本でした。私たちは思いっきり、力いっぱい上演出来ました。

東大生から安田講堂で上演しないかとの話もありましたが、その直後、芸大の4階から機動隊が安田講堂に突入するのを見ました。

山形の冬に、黒川能を到津、松本、私の3人で見に行きました。大雪の真夜中での、眠気と幻想に、3人とも参ってしまいました。

卒業後には、彼女と千葉の団地で子供たちの絵画教室を開きましたが、数カ月で後輩にゆずり、私は数人で作った人形劇団の仕事を始めました。彼女はバイトをしていたようです。

2年後に劇団は解散、私は郷里の福井に帰りました。彼女は、人形劇団の一人とパリでの生活が始まりました。

10年ほどが過ぎ、彼女が帰国してから数回、渋谷で会うことがあります。最後に会ったのは銀座三越個展でした。一年に数回電話がありましたが、突然の訃報が入ってきました。

彼女の最後が一人でなかった事に感謝します。ありがとうございます。

吉岡 耕二

私が最初に到津伸子さんと出会ったのは、1980年代のPARISでした。

当時は、日本人と出逢う機会もあまり無く、たまたまギャラリー街を歩いている時だったと記憶しています。彼女は毅然としていて、常にマイペースで、自ら自分の作品の話をするのは殆ど無かったですね。ギャラリーの話になった時に、モンマルトルにも良いギャラリーはありますと教えたことはありました。おそらく、ギャラリーを探していらしたのでしょう。

最初の出会いからずいぶん経ってからですが、「パリメランコリア」「画家猫カーチャ」等の彼女の作品を拝見して、彼女らしい自由な色彩や大胆な作風に大変オリジナリティーを強く感じました。

それから何年も過ぎ、渋谷のBunkamura Galleryでフランス人の女性アーティスト、フローランス ミアイユさんの展覧会を観てハッと到津さんの作品を思い出しました。とても共通点を感じたからです。

私は、直ぐにミアイユさんの展覧会を企画提案されていたサンカイビの平田さんに、到津さんを紹介したことを覚えていません。

しかし平田さんを紹介した話を、到津さんを偲ぶ話で語るとは思いもしませんでした。

到津さんは、まだまだたくさんエネルギーを持っていたはずだったから、これからの作品を拝見したかったですね。本当に残念です！

ジャック・レヴィ

いつごろから到津さんの年賀状が届くようになったのだろう。2000年代に入って数年たってからだと思うけれど、正確には覚えていない。決まって最後に届く年賀状で、干支に合わせて構成された絵は、清々しさと喜びに満ちていて、いつもどこか意表を突くものでもあった。そう、彼女の絵柄は決まったモチーフや様式に収まることなく、いつも愉快的何かを予感させてくれる驚きを与えてる。裏には、展覧会の予定や執筆の進行状態など、そして時には心境が、手短かに、引き締まったフランス語の字体によってつづられている。二年に一度ぐらいのペースだったのかな、連絡を取り合って、画廊内または神楽坂周辺などの店で会い、ゆっくりお話しすることになる。毎回、やはり不思議なひと時だ。そこで交わされる会話に当然テキストがあるわけではなく、時事的な事柄に触れたり、たわいのないわさ話をしたり、共通の知り合いまたは映画や小説について気ままに話すだけなのだが、時々彼女からのちに私の心に深く刻まれるような言葉がこぼれてくる。それは、例えば写真の話をしていて、70年代の写真作品に見届けられるこのこの光の性質はもはや再生不能なのよ、といった類のセリフなのだが、どういけばいいのだろう、不思議なのは、出会った人の話をしていても、鑑賞した作品の話をしていても、まるでじかに出会いがポートレートに化けていくかのように、常にその「印

象」が単に「しびれ」や「残響」として消えていくのではなく、一つの「絵」として、つまり「印象」自体がそこにあるものとして描きぬけられる、無邪気でもあり、恐ろしくもある、アーティスト気質ならではの、彼女から伝わる力。しかし、その時も今も、彼女と過ごした時間は終始穏やかで、このような陳腐な表現が許されるのなら、まるで経過していく年月のほとりで、一息つく和やかなものだったように思えるばかりだ。

到津さんに初めて出会ったのは1980年代の暮れ。パリのマレー地区にあった彼女のアトリエ兼住居だったと思う。最初に目にはいるのがあの大きな騎馬にやや斜めに乗った少女の絵、そして無数のポートレート。色彩は明るいものでもあり、暗いものでもあるのだが、なぜか透明度が高い。線はメリーゴーランドやドア、壁といった背景によって、人物たち（のちの猫たちと同様に）を前景化させるのだが、そこで描かれているのは決して「キャラクター」たるものではなく、また「モデル」の表象でもない、ただそこに「ある」ものなのだ。そのころ訪れた中上健次が、すぐさま彼女の作品の核にあるものに目を付けたことをうれしく語っていた。また、そのあともその瞬間の「みずみずしさ」について幾度も彼女は触れていた、最後に会った時も話していたような気がする。数年後、私はこの作家の仏訳に取り掛かることになるのだったが、彼の病気のことを最初に教えてくれたのもそういえば渋谷で再会した時の到津さんだった。

絵や写真を重ねて、文章を書くことによってつかみ取れる、信念や宿命以前に「そこにあるもの」についても、いつも鮮やかに話してくれていた到津さんの表情、姿。思えば三十年ものあいだ、無数のサンプルといった形で私に呟きかけてきて、今もさらに激しく、やさしくつぶやきかけてきている。まぎれもなく、彼女と過ごした挿話的でありながらも切れ目のない時間の記憶、そこでの軽妙な語り口、あの素敵な悪意を常に持ち合わせた彼女の創造物たち、すべて、ずっと、ずっと寄り添ってきてくれたという思いのなかに今もなお私は住み続ける。

氏名不詳

推薦文

到津伸子氏のこのエッセイは私をパリで過ごした青春の日々に引き戻してくれた。このまま読み終えてしまうのが残念で、昔の思い出に浸りつつ、最後の頁を繰った。

作者は豊富な経験を事細かに、また豊かな表現で書き綴り、飽きさせない。短編映画のように、途切れなく溢れる様々な物語が、いつのまにかひとつの物語を編み出している。向かいに座る、上品な装いの少しわがままな日本人女性、私はパリのどこかで到津氏に出会ったのかもしれないと、ふっと彼女に親しみを感じた。

私はニューヨークの雑踏ですれ違った人々を思い出した。ファッションモデルと言わんばかりの自信に満ちあふれて闊歩するニューヨーカーたち、誰もが急ぎ足で、赤信号でも構わず横断歩道を渡っていく。そんな彼らの中にお年を召した日本人女性二人連れの姿があった。髪をきれいにまとめ、手には京都の一澤帆布のバッグを持ち、ロングスカートを穿いていた彼女達は、雑踏に紛れながら信号が変わるのをじっと待っていた。その姿が妙に微笑ましく、なぜかいつまでも印象に残った。

到津氏の文章が好きだ。彼女が見、表現し、感受性豊かなそ

の内なる部分をさらけ出している。翻訳からも十分その魅力が表現されている。時に絵筆を取り表現し、また文字で表現する。絵描きであると同時に、優秀な評論家にもなる。彼女が本書で取り上げた作家や作品の評論部分は、するどくありながら決して小難しい専門家たちの評論とは違い、私も共感を持った。

私たちは皆、同じような経験を持ち、同じような思い出を持っていても、綴る物語はいつも各々異なるもので、それこそ物語を読む醍醐味だと思う。それはちょうど歴史が、記す人の思想や経験によって全く違った物語が書かれるのと同様である。また、神は我々に平等のチャンスを与えてくれていても、私たちがそれに気づかない場合もある—ニューヨークで偶然ウディ・アレンに遭った映画好きな文学青年や、町一帯を封鎖して撮影された『欲望都市』のロケ現場にまぎれこみ、大好きな俳優にバッタリ会えたという女の子などはそんなチャンスを感じた例かもしれない。到津氏が出会ったのは猫だったようだが、私は有名人そっくりな犬を見かけたのもひょっとして—。

到津氏は日常で見たもの聞いたものを、詳細まで記録している。マクドナルドからその時の流行、それから話しはアメリカのファーストフード文化に至り、はたまたファーストフード文化から伝統文化を守るフランスの政策・・・と話題は尽きな

い。私は本書を読んでいて、パリのマクドナルドでの出来事を思い出した。たしかルクセンブルグ公園の近くのマクドナルドで朝食をとっていた時のことだった。一人のマダムがうっかりコーヒーをこぼしてしまった。決してわざとではなかったのだが、感じの悪い店員とケンカになった。床を拭きながら店員が漏らした小言で彼女は頭に来て、帰り際にガラス扉を蹴飛ばした。不幸にもガラスが割れ、通りがかった人が警察に通報、その女性客はパトカーで連れて行かれてしまった。ただマダムがうっかりコーヒーをこぼしただけのことで、こんなに事が大きくなるなんて。

淡い黄色、明るい黄色、眩しい黄色からため息の出るようなくすんだ黄色といった風に、作家の叙述スタイルは映像的で多彩で、作者の思いや評論、反省が所々に散りばめられている。エスプリと人を引きつける表現力で、彼女の目に映ったものを記していく。本書は連載小説の始まりのようで、続きはどうなるのか、とついつい考えてしまう。

グレーの屋根を覆う薄暗い空、人を眠らせない不夜城のパリ。この街を舞台にしたあらゆる物語が、旅人たちの思い出で綴られている。彼らは「行く」のか「帰る」のか？眠るパリ。パリが Bon jour、と言い、パリがさようなら、と私につぶやく。

私はちょうど今年2月にパリに行った。平均気温は摂氏5度ほど陽が射す天気が続いた。パリは随分変わっていた。

まずバイクが頻繁に見られるようになった。100年前の町並みを思わせるムフタでも、50ccバイクに乗って走る人がいた。珍しくフルフェイスの真っ黒なヘルメットをかぶっているバイカーをぼんやりと私は見ていた。が、バイクが近づいてきて初めて彼が黒人であることに気が付いた。これまでパリではバイクは中流階級の白人が乗るレジャー用品で、ピザ配達のアルバイト以外で黒人がバイクに乗っているのを目にした事がない。またあるカフェの窓際に座っていた女性は一人でタバコを吸いながらビールを飲んでた。彼女は相当の年齢で、目じりはたるみ皺が刻まれていたが、彼女の目の奥には、なんとも言えない哀愁を感じさせられた。そんな彼女の横では若い学生4人が、学割半額という社会福利を享受している。そう、パリでは若者は優遇されているのだ。若いというだけでなんと半額！そのカフェではまた、思わず頬をたたきたくなるほど大騒ぎしているイタリアの若者たちに会ったこともある。彼女たちはよく太っていた。南欧の彼女たちは顔立ちがとても端正なのに、一旦、Lolitaの時期（13、14歳）を過ぎ、セックスを経験すると、彼女は大地の母ばりに肥えてしまうというから不思議だ。身体の線に一切無頓着になってしまうのだろうか？パリジェンヌの大部分はちょっとでも肉が付いたら悲鳴を上げるほどダイ

エットしているというのに。

ヘミングウェイはこう言っている―「私たちはかくも若く、かくも貧しい。しかし一度パリにくると、我々はなんて幸せなんだ」。カフェで見かけたビールを飲むあの女性にも物語がたくさんあるだろう。物語がたくさんあればあるほど、女性は美しくなれる、と私は思う。

物語をたくさん持つ女性が書いたこの本には、魅力が一杯だ。

最後に

2018年12月17日、到津伸子と私は、有明のがん研有明病院にいた。

検査の結果を聞くため、担当医師と個室で対面した。

話の内容は過酷で、決定的な死の宣告の言葉だった。

膵臓から発生し増殖するガン細胞が、周りの幾多の臓器に転移して医学的見地からは、手の施しようがなく、今日、明日にも血管ごと破裂し、絶命に至るかも知れない。というものだった。医師とのやり取りの途中、彼女（伸子）から「安楽死の方法はないのか」という問いに、現在の日本では、まだ安楽死は認められていない。という返答があった。

突然の痛苦と言うべきの死の告知の後、彼女は点滴を打ちながら、私と病室に戻った。

彼女は、ベッドの上に座り、少し宙空を視た後、顔を俯き加減にして数秒間、今までに見たことのない憂鬱な顔をした。それは、私が今まで見た人間の表情のなかでも、最も憂鬱な顔だったかも知れない。

それほど強烈だった。

瞬間、私の身体の奥に熱く重い痛みが拡がり、空無な全身に充滿していった。だが、その表情から私は、彼女の病に対する、そして死に対する姿勢、彼女自身に向かい合う強い意志、決意をも認めた。

個々人は皆、違った自意識を持ち、個人の肉体の、その全重量のなかにあり、饒舌に語られる言説より、さりげない一瞬の表情のなかにも、その人は棲んでおり、その個人を超えて、深い意味、ことがらを示してくれることもあるのである。

人は皆、この一瞬と言う、生の奇跡的な偶然を生きている。

その日から、1ヶ月半、1月31日まで過労で発熱して1日臥せった日を除き、私は毎日、がん研へ通った。

入院の翌日、病室に着くと、彼女の顔は晴朗だった。

彼女が「昨夜、隣のベッドで、お爺さんが『お前が居なくなったら俺は生きていけない』と云って泣いていた」と云った。私はカーテンの隙間から、そっと隣を少しだけ覗いた。

そこには誰もいなくて、ベッドもなかった。私はカーテンを閉じ彼女に小声で「誰もいないよ。もう死んじゃったんだね」と云った。

私と彼女は、顔を見合わせて沈黙のうちに微笑んだ。

その日、彼女の長編遺作「遙かなる東京」の最終推敲の為、消灯時間を気にすることなく過ごせる病院の最上階の個室へと移動した。

その部屋は、ベッドに沿って天井まで一枚硝子の全面窓であり、季節は冬だったのに、昼間には暑い陽射しが差し込み、夜には満天に輝く星空と、群青色の闇の中を夜間飛行する飛行機のライトの点滅が移動し、眼下に東京湾も広がる壮麗な眺望だった。

入院中、彼女の私への注文は多かったと云っていいだろう。あれを、これを持って来て、から、何をどうするか、まで、こと細かに指示が出て、例えば、衣類だったとして、彼女の部屋を探索して私が持参したものと、彼女の云ったものが違った時、彼女がそれを身につけることはなかった。

彼女はそんな人だった。私もそれを、快としていた。

彼女は入院中、2度自宅へ戻った。医師は、免疫力の低下に伴う感染症を懸念し、なかなか許可しなかったが、彼女の意志が勝っていた。

自宅に戻り、一つの個室を改装し、介護ベッドを置き、制作を続ける計画を語る驚異的意志は、私の疲労さえ、かき消すものだった。

彼女は亡くなる2週間前、ベッドの上で「目を閉じるとお花畑が視える」と云った。

彼女の死後、彼女と共通の知人の霊能力者が「伸子さんは、肉体が減びる2週間前に魂は天国に逝った。稀なる存在よ」と云った。

我々は現在、現、近代と言う奇妙でさえある時代区分に生きている。

近代とは、技術の進化発展に依り、最も効率よく、同種間殺戮、人間、人類の大量殺戮を実現した時代でもあり、本来、関係の生物である人間から、人との関係のみならず、自然との関

係であれ、すべての関係の質を希薄化して、肉体から野生は削がれて、技術の支配の進化は人間の感覚の鈍化を拡大し、価値の根源である筈の人間は退化して、関係の衰弱化、擬制の進歩、進化幻想のなかに我々はいる。

人は近代的悟性など超えて、自己が知り難く、測り難いことに敬虔でなければならない。

到津伸子は入院闘病中、膨れたお腹を見ながら「私のお腹のなかにはエイリアンがいるわ」と云った。が一度も痛い、苦しいと漏らすことはなく、いつも笑みさえ浮かべて冗談さえ交わしながら過ごした。

最期に息を引き取る直前、呼吸は荒くなり、全身で苦しむのを見て、私は空虚な肉体の感覚のなかで、唯、替わられるものなら、という思いだけに捉われていた。

看取ったのは、私と、彼女の従妹の礼子さんである。

死は、生の苦からの解放であり、死は苦しみである。

死の数日前、「死に顔なんて、誰にも見られたくないから、火葬はあなた一人で済ませて」と云われていたのに、約束を果たせず、近しかった方々と見送った。

火葬から、随分時間が経って「あんなに美しい死に顔は見たことがなかったから、写真に撮りたかったのに遠慮してました」と云ったのは、平田美智子さんである。

今回、到津伸子の「偲ぶ会」を巡り、呼びかけ人になって下さった方々、追悼文を書いて下さった方々に、心から感謝とお礼を申し上げます。

皆さまに到津伸子が残した記憶の刻印には、私の知らなかったことも多々あり、何よりも彼女の存在の強さを改めて感じるとともに、深く響くものばかりでした。

私の敬愛する方で、追悼文を書くことを拒まれた方もいらして、そのことは、今も重い沈黙の意味を投げかけてくる。

また、生前の彼女と面識がなかったにも関わらず追悼文を書いて下さった、伊藤操さん、茶園敏美さん、に心よりお礼を申し上げます。

お忙しいなか、到津伸子の「偲ぶ会」を開催して下さった、ギャラリーサンカイビの平田美智子さんには、感謝の意に堪えません。

平田さんなしには何事も起こり得ず、今更ながらに、その存在の大きさは言葉では言い尽くせません。

追悼冊子のみならず「偲ぶ会」全体について教示してくれた、共同通信社の小池真一さんには、お礼の申し様もないほどの謝意を示したいと思います。

中山 雅仁

到津伸子回顧展は、2022年10月20日～25日 日本橋の
ギャラリーサンカイビにて開催されました。



ギャラリーサンカイビ

〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-22-5

MAIL : info@sankaibi.com

URL : <https://www.sankaibi.com>

装丁・デザイン 鈴木 道子

到津伸子を「偲ぶ会」

中山 雅仁

Nobuko.Itozu@gmail.com

